

[002] 九大國文學表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10575>

出版情報：九大國文學. 2, 1931-10-05. 九大國文學研究會
バージョン：
権利関係：

紹介と批評

時枝誠記氏論文

古典註釋に現れた語學的方法

京城帝國大學法文學會編『日本文化叢考』は同學會第二部の論纂第三輯として發行されたもので、次の五種の論文を収めてゐる。

支那文學の馬琴の作品に及せる影響……麻生磯次
古典註釋に現れた語學的方法……時枝誠記
朝鮮及び内地發見の耳飾に就いて……藤田亮策
山家鳥虫歌と近世民謡の一面……高木市之助
佛師定朝……田中豐藏

こゝには右の内『古典註釋に現れた語學的方法』を紹介しようと思ふ。

古典註釋は、古典の生命の外廓を低迷する無益の鑿索であるといふ批判が精神科學的研究の方法を論ずる者によつてなされる。然しそれは漠然とした非難である。註釋者自身に於て又批

判者に於て少しく精細な吟味をするならば必ずしもさうでないことが明かとなるであらう。古典の註釋は寧ろ古典の生命の中心核に突き進まうとする努力である。かくの如き意味に於て古典註釋の、殊に過去に於けるその學問的地位を明かにし、その眞實の意味を再吟味しようとする事がこの論文の目的となつてゐる。

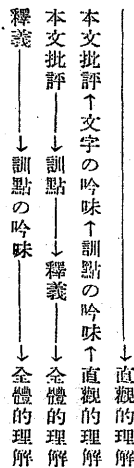
先づ第一總論の條に於て、古典註釋のこの一般の意味が論究されてゐる。時枝氏によれば、註釋に於ては、すべての努力が、「古典を讀む心」によつて導かれ統一されて行く。而して讀む心にとつての第一の關鍵は言語的理解である。註釋は先づこの障害の除去に向つて力を注ぐ。それ故に一方より顧みれば過去に於けるすべての語學的研究は全くこの古典の全體的理解を旨とする以外の何物でもなかつた。かくして氏は明治以前の註釋事業の意義をその細部分化の表面的混沌の深底に横はる根本的意味に於いて綜合的に理解しようとして、同時に、古典註釋に於ける國語研究と明治以來の西洋言語學に刺戟されての一般國語研究とを明かに區別し、前者を「註釋語學」と名づけられ

た。それは古典を讀まうとする心に導かれる所の、具體的存在としての國語の研究であつて後者が抽象的な一般國語を對象とするのと著しく異なるのである。従つて「註釋語學」に於てはその對象の相違に基いて方法にも自ら相違を生ずる。即ち「萬葉集」には、萬葉集の要求する語學があり、古今集には、古今集の要求する語學がなければならぬ」と言はれる所以である。それ故にかくの如き註釋はその上代文獻を對象とする場合と中古文獻を對象とする場合とに依つて頗る異なつた方法を要する。上代文獻を對象とする場合に先づ第一の問題は訓法である。上代の言語が意文學を使用せるが故に生ずるこの訓法の研究過程は、氏の稱せらるゝ如く、「文字より言語への還元」である。

「言語還元の作業は我々の思想表現の過程を、逆に復歸せしめる作業であつて、古典註釋の基本問題である。」「遡つて萬葉集の註釋史を見るならば、そこには、先づ、意文字を通して、これを言語に還元する作業が、註釋史の大半を占めて居るのに氣付く。萬葉集に於ける言語還元とは、所謂、訓點施行の研究であつて、文字の裏に秘められた、上代人の言語を、その昔の姿に顯現せしめようといふ努力である。」(二三頁)

かくの如き氏の言葉は過去の國文學研究の本質の一端にふれたものである。氏はかくして古典註釋に於ける語學的研究の内的意味を闡明しようとしたのであるが、この言語還元過程に於て吾人は屢々文學的研究の要素が深い思ひとして籠められてゐるのを感じる。先人の古典註釋は、一つの結論としてでは

なくとも、心的過程として文學的研究を含んでゐたと思ふ。殊に言語表現から、それに直接せる内面を讀みとつた跡をこの言語還元過程に見るのである。(この點については九大國文學第一號拙稿、「本居宣長の古事記研究小論」参照) 氏はついで萬葉集仙覺抄の方法論的考察に進み、その註釋の本質的意味と註釋史上の地位とを明かにせむとされた。氏によれば、仙覺に於ける「註釋の方向」は、古點時代を思はせる直觀的理解に初まり、更に極めて複雑な過程を現出してゐる。その二三を圖示すれば次の様である。



かくして仙覺抄の成立過程を次の様な體系の下に理解せむとされた。即ち「仙覺抄の註釋事實の整理は、先づ、註釋を誘導する處の仙覺の言語意識の如何なるものであるかを明にし、次に、それら言語意識による註釋への過程を明にすることである。註釋の過程を明にするに當つては、註釋の起點を、一、文字より言語への還元作業、二、語の意味の理解の二つに大別して、これらの還元並に理解の過程に於いて、如何なる方法が試みられたかを考察して見る。」次に、仙覺の註釋に於いて、註釋の成立する條件として考へられた事、一は、如何なる方法によつて、目的とする言語への還元、或は語の意味は理解せられ

たか、即ち、發見の過程と、二は、還元せられた言語、或は理解せられた意味がはたして妥當であるか否か、即ち、妥當性の説明との二つが具備せられて居ることを明にしたい。」(二四八頁)

以上の方法によつて仙覺抄の本質的な姿は明瞭に示されるに到つてゐる。たゞ「本稿に於いては、註釋批判の問題は別として、右の如き註釋過程の事實そのものを闡明することを以て主眼となし、批判の第一歩たらしめようとしたのである。」然し、註釋の批判は、「これらの結果に導いた方法と、この方法を誘導した言語意識の批判によつて決するわけである。」それ故に、註釋過程の方法論的考案は一層の重要性を有つこととなるのである。

かくして氏は、先づ「仙覺抄の註釋を誘導した主要な言語意識」に就いて細論された。「言語意識とは、言語に對する我々の意識を意味する。」仙覺抄に於ける言語意識は、氏によれば次の如きものである。

- 一、言語の新奇に對する意識
- 二、先驗的正規的言語に關する意識
 1. 本韻、末韻、男聲、女聲、
 2. 相通(同韻相通、同内相通)
 3. 略言
 4. 約言
- 三、音義意識
- 四、語の職能に對する意識

紹介と批評

1. 發語

2. 助ノ詞、附、テニヲハノ字

3. ホムル詞

五、語の構成に對する意識

六、語の本義に對する意識

七、言惣意別の意識

八、語と記載法との關係に對する意識

仙覺の言語意識を以上の様に見て、更にそれに基いた、「文字より言語への還元」及び「語の意味の理解」に於ける方法を各々四つ摘出し、仙覺抄に即して詳説しておられる。それによつて仙覺抄の內的體系は明かに示された。

「結」に於て再び、この論文の目的が顧みられてゐる。即ち「國語研究史の對象の一部は、かくの如き文献の理解を目的としての語學的註釋を導く言語意識そのものと共に、理解を経た文献より導き出される言語意識の二つを對象とする。」而して、「國語研究が一つの獨立した目的を構成しない限り、國語に對する意識は常に註釋を中心として、それに向つて働きかける。」それ故に斯に於ては「語學的研究を註釋そのものに融合せしめて、註釋批判の對象をその語學的方法の中に求めようとしたのである。」(二四七頁)

而してこの目的は達せられ、この論文に於て古典註釋の眞義が再認識された。たゞ筆者は、既述の如く、かゝる註釋の過程には、それが對象の全體的理解であるが故に、對象の文學的性

質の把握が同時に融合してゐる場合の存すること、従つてその様な意味も古典註釋の中に認識されねばならないと思ふのである。(昭和六年九月十五日發行、東京市麻布區新河原、万五書院、定價三圓)(佐月)

野村 八良氏著

上代文學
に現れた
日本精神

第一章に於いて、上代の文獻、國語の特性、古史神話の特質並びに上代史に就いての概観がなされてゐる。國語の特性としては、その「音韻組織の單純」と「文學的美辭の發達」とが著しいものとしてあげられ、後者は「上代人の聽覺の鋭さ」と「聽覺的美感」の結果であると説かれてゐる。その他極めて一般的な説明に過ぎない。

第二章は本論であつて、「上代人の生活及び風習」と「上代文學に現れた日本の諸觀念」との兩節を含んでゐる。著者によれば、前節はつまり上代人の生活の物質的方面で、食物から舟まで、衣食住全般についての文獻學的な敘述である。後節は、文學に現れた種々の精神現象の指摘とその説明である。これに依つて、上代人の生活の事實は列舉せられたが、その説明は概観的である。兩節を通じて著しく感ぜられるのは語源的解釋である。そしてその中には未だ吾人の納得の行かないものが屢

々ある。例へば「シホの古音は *Shipo* であつたやうで、其れがアイヌ語に入つて *Shippo* となつてゐる」とあるが、それが P 音説によつて今日定説となつてゐることは云ふ迄もないことである。然し、「尙シホはシフであつたではないかと考へられるが(フトコロがホトコロと訛られることから見て)文獻に徴證がない。」(八六頁)と云はれるのは、その傍證よりすれば駄足ではないだらうか。フトコロがホトコロとなるのは寧ろ母音諧調の現象であらうから。又、モ(裳)に就いて、「ハカマといふ語の存在を併せ考へると、モよりも古くマといふ語が用ひられたのであらう。」とあるのも同様な誤謬ではあるまいか。或は、オヤに就いて、「ヤに本來の意味がある。さうすると其はヤ(家)と同一語で、家主たる意で、親の意となつたのかも知れぬ。」(一六三頁)とか、「神祇を數へるのに一柱、二柱などと云ふのも、ヒトカシラ、フタカシラの意と考へると、能く分る。」(二〇五頁)とかの説明がある。前者は勿論、老幼が古くア列で名詞となつたものであらうし、後者は、「われ〱が試に手を下げて仰臥するとき、釣合上、カシラ(頭)は柱の如き重要な地位に在ることが考へられる。」と云ふのでは單なる主觀的説明に止まる。本書は上代文學に現れた種々の事項の一般的説明であるが、又更に、精神生活の深部の統一的な探求が、一方に於いて必要であらう。上代の研究は原始の探索ではなくて、起源への回顧であり、現代に強く連なるものでなければならぬのである。

(昭和六年十月五日發行、東京市麻布區新河原、大岡山書院、定價三圓)(佐月)